

## 多様なパターンジェネレータ

1回、2回、3回と連続的に動きをリズムカルに続けられリズム運動ということになるわけですが、1回目と2回目の時間間隔から、次の時間間隔を予測し、これを再現するといったことがパターンジェネレータへの移行を促す…これが前回のまとめでした。そこで、このパターンジェネレータのことに付いて触れることにします。

そもそも、リズムカルな運動であっても、毎回の運動を微妙に変化させる場合と、まったく同じ運動を繰り返す場合とでは異なった仕組みがあります。例えば、大根の千切りであれば、サクサクと切り刻んでいきますが、散らかった物を次々と拾うとなると、目で確認しながら運動を続けることとなります。その違いを思い浮かべてみてください。

もちろん大根の千切りも目を使うこととなりますが、包丁を右手で使えば少しずつ左方向に包丁を移動させて、そこに目を向けて、包丁のさばきを見つめることはありません。散らかった物を拾う場合は、拾う物自体を見て、拾う手も同時に見ることとなります。次々と拾い上げていく動き自体は、それなりにリズムカルであることは間違いありませんが、この目のわずかな使い方の違いがパターンジェネレータに大きな差を生み出すこととなります。

まず、この2つの動きの違いから考えてみます。大根の千切りでの包丁のリズムは完全に自動的な運動として発揮されるのに対して、物を拾う時には時間的な意味ではリズムカルであっても空間そのもの、つまり手の動きは違った場所へと動かし変化していくこととなります。そのため、大根切りの時のリズムは典型的なパターンジェネレータによるリズムの発揮ということになり、脳と神経による回路によって、一々意識しなくても連続的に同じ運動を繰り返すことができます。

物を拾い集める場合のリズムはどうでしょうか。先ほど「時間的にはリズムカル」と述べました。この部分ではパターンジェネレータによると言えますが、大根切りとは異なることは想像できるでしょう。目の使い方が違うということに加えて、動きの速さそのものが異なります。要するに、パターンジェネレータは単純に1つのものとして考えることはできないということになります。この背景には、パターンジェネレータにはいろいろな段階があるとともに、その学習の仕方にも差があり、結果的に多彩で多様な運動、動作のリズムの発揮が可能になるということが関係しています。

まずパターンとしては、時間的なリズムが形成され、少しずつ発達すると空間的な動きと連動していくという過程を経ていきます。見方によっては同時と思えるほど短時間、短期間でのごとです。しかし、完全に時間的なリズムが作られて、空間的な動きとつながっていくのかというと、そうではなく、両者が重なりながら進んでいきます。この点は、非常に複雑な過程があるのですが、ここでポイントとなるのは、時間的なリズムが単に時間的なものだけで完成するのではなく、空間的な動きそのものを通じて完成するということです。次回からは、もう少し詳しく説明していくことにします。

